

第2回佐賀市こども・教育・福祉分科会 議事録

◆ 日時

令和6年7月12日（金）10:00～12:00

◆ 会場

ホテルマリターレ創世 佐賀 3階 グラツィアホール

◆ 出席委員（敬称略、五十音順） ※◎は分科会長

荒木健、池田敦子、今村正治、岡山香織、近藤慎也、坂井克宏、◎田口香津子、
細川亮、吉村純子

◆ 欠席委員（敬称略、五十音順）

谷口仁史、吉原正博

◆ 事務局

子育て支援部長、教育部長、保健福祉部長、教育総務課長、社会教育課長、子育て総務課長、保育幼稚園課長、こども家庭課長、福祉総務課長、健康づくり課長、保険年金課長 外

◆ 傍聴者

0名

◆ 議事要旨

1 開会

《説明》

○市民説明会結果に関する説明（事務局）

《自己紹介》

○委員の自己紹介（前回欠席委員）

2 議事

(1) 政策「子育て・教育」「健康・福祉」について

《説明》

○「基本計画」前回分科会後の追加意見について説明（事務局）

《意見交換等》

○司会（分科会長）

先ほどの説明について、ご意見、ご質問があれば伺いたい。

○委員

市民目線で計画を見た時に違和感があった点を挙げさせていただいた。1つ目に、将来像の「佐賀らしさでみんなが上を向くまち（仮）」について、説明に「佐賀らしさ」が何回も出てきたが、わかりにくいところがあった。最後にバルーンが出てきて見上げるというつながりと思うが、佐賀市の将来像をわかりやすく掲げるにあたり、抽象的なわかりにくいものがあると、伝わるのか懸念がある。

例えば、花の都パリや水の都ヴェネツィアなど、わかりやすいキャッチコピーがあるため、わかりやすい佐賀市のキャッチコピーがあってもいいのではないか。豊かな自然と福岡に近い暮らしやすさから、「調和のとれた美しいまち」「おいしい水と空気のまち」「田園未来都市」などを考えている。良いところに住んでいることがイメージできるような言葉にしてほしい。

No2 では、「便利な暮らし」の説明が不足していると感じた。教育や子育てのDX化などにつながると思うが、現代社会ではネット環境は必然であり、それが整った暮らしやすい田舎がイメージできればと思う。

No3～6 では、①②③④は自然環境という意味合いでまとめられるのではないかと考える。

No 9 番に関し、将来像に向けた目標では、「変化に向き合い挑み続けることで進化し続ける「まち」になろう」というのは、「しよう」と「なろう」主語が何になるか、統一した方が良いと感じた。

No10 に関して、キャリアコンサルタントとしての活動を通じて、佐賀市に対して仕事についてもしっかりと向き合ってもらいたいと思っている。「どんな人も自分らしい「しごと」で新たな価値を生めるまちにしよう」は、何となくはわかるが、それぞれの働き方を実現することで、満足度、幸福度を上げられるまちと捉えている。また、「新たな価値を生めるまちにしよう」について、新たな価値を生めるにあまりイメージがわからないため、他の委員の意見をお伺いしたい。

○事務局

いただいた意見については、総合・地域分科会に意見を提出し、そこで審議をさせていただきたい。

○委員

No14 では、「AI 等の最新技術と～」とあるが、活用することでどう実現できて

いくのかというイメージがわからなかった。また、時間や気持ちの余裕ができたとしてもすぐに地域と深く結びつくことは難しいのではないか。時間と気持ちに余裕ができ、次に地域とつながる経験をして、つながっていることの安心感に気づき、地域での生活に良さを感じるのではないか。地域につながって、視野が広がり、価値観が変わり、自分なりのこうやりたい、関わりたい、役立ちたいと思っていくと考え、文章の順番を変えた方が良いと考える。

○分科会長

こちらの意見についても、総合分科会に提出して審議したい。

○「子育て・教育」前回意見と対応について説明（事務局）

○分科会長

先ほどの説明について、ご意見、ご質問があれば伺いたい。

○委員

外国人について横断的視点に加えていただき、また人口統計資料についてもありがたい。外国人人口が増えるのも時間の問題となっているが、留学生の比率など、その内訳についてもっとわかるとよい。

また、大学との連携についての記載は、佐賀に大学が四つもあり集中していることを市民が認識し、市民ももっと大学を活用しようと共有することと意図していた。産学官連携が遅れているなどとは思っておらず、もっと活用していこうという思いである。

○委員

No2 の目指す姿への意見収集について、対応方針に「一定数の意見は聴取できている」という回答であるが、本当にこれで市民の声を反映できているのか。確か、高校生は 8 人、大学生のワークショップという限られた人数の意見ではないか。また、不特定多数の方へのアンケートであるが、郵送による配布の回収率は 28% で、高齢者の回答が多いのではないか。年代的にまんべんなく意見が反映できるのか懸念があるため、年齢構成などをお聞きしたい。

高校生ワークショップの市長と意見交換では、今のまちの魅力として、「人、まち、食べ物、自然」という人が多く、魅力についての意見はあるが、魅力じゃない点についても聞くことで課題が出るのではないか。こうなってほしい、ここを直してほしいということ、オンラインで意見を出せる体制となれば良いと感

じた。

○「子育て・教育」前回分科会後の追加意見について説明（事務局）

○委員

「こどもの幸せを何よりも優先するまち」と、最優先という感じは重いのではないか。目標に「どんな「ひと」も自分らしく幸せに暮らせるまちにしよう」というものがあるため、子どもの幸せを軸としながら、その人らしく楽しく関わるまちが理想なのではないか。「こどものため」がみなのやりがいや成長にもつながる、育ちあえる環境がイメージできるといいと考える。

○委員

子どもの幸せを重視いただくのはありがたいが、「何よりも優先する」という表現は適切か。他にも大事な項目はあるため、市民から意見が来ないか、懸念がある。

○事務局

総合計画では、子育て・教育を一つの政策と捉えており、他の政策との優劣というものではなく、子育て・教育では何よりも子どもを大事にするメッセージとしてこの表現としている。

○委員

私は子育てをしているわけではない人が、子どもの1年は早いものであり、大人と比べて優先するというのにはありではないかと感じた。当然、子どもは大事で高齢者は違うという話ではないが、どこに資源を集中するかを考えた時に、子ども優先が豊かさにもつながる、そういった表現も大事ではないかと思う。

○委員

「何よりも優先する」というのは引がかかるところがあるが、もしこれを本当にやるのであれば、佐賀市が子育てを最優先として本気でやるために使われるのであれば賛成である。そうでなければ、単に掛け声で終わってしまう。政策としてこれを実現していくために事業に取り組むという強い意志があるのか。

○委員

皆さんも近い気持ちだとわかったが、対象がまちで親がというわけではないが、

「何よりも優先する」が気になる人もいると思うので、変えるのが良いと思う。

○委員

前回会議の議論で、目指す市民等の姿において「1が子ども・小学生」をイメージしているとあったがわかりづらく、そもそも「子ども」といった時の定義はどうなっているのか。具体的に入れた方が市民にとってわかりやすいのではないか。

○事務局

1つ目が就学前、2つ目が小中学生、4が高校生以降と考えて、施策を整理している。また、この計画では、大人と子どもとで大きく分けており、大体18歳までが子どもとして記載している。総合計画はどうしても抽象的にせざるを得ないため、対象を詳細化・具体化する必要がある場合は、総合戦略やほかの計画で定義する。

○委員

資料1のNo14で「こども家庭庁では、「こども・若者育成支援」を使っている」とあるように、大人と子どもの区切りが18歳はそうであるが、若者という概念が薄いと感じた。行政の管轄もあり、大学生は大人かもしれないが、これからの担う比較的若い人材として若者とするのもよいと思う。

○分科会長

佐賀市の教育委員会などの範囲が中学生までであるため、どうしても県の範疇である高校生に対する取組が薄い。総合計画ではあらゆる世代の佐賀市民をサポートしていただきたいという思いはある。

No21で「佐賀らしさ」について、アンケートの結果である「自然の豊かさや人のあたたかさ等」の特質を持った佐賀市の教育については、AI・DXなどのICTの推進とともに、重視する教育内容としてしっかりと入れてほしい。入れないと佐賀らしさが薄れてしまうため、「リアル」について「五感をフルに活用する自然体験あるいは直接体験を十分に味わう教育プログラム」といった内容が想定されるような記載としてほしい。

○事務局

学校教育において、DX化を進めるとともに、佐賀らしさを実感するような教育も並行して進めていくつもりである。具体的な事業や施策の内容については、総合戦略や個別計画において記載していきたい。

○事務局

補足として、四つ目の生涯学習のリアルとバーチャルに関し、リアルの自然の豊かさを体験する事業などに加え、バーチャルも「スチューデント・サポート・フェイス」などが新たに取り組んでおられる。リアルと同様にバーチャルな子どもたちの居場所づくりも、どちらも重要である。16年後を見据える中で、何が功を奏するかわからないため両方を並列で表現している。

○委員

先ほどの佐賀のリアルな体験について、リアルな現場が佐賀にはたくさんあるため、それを生かすことも大切と感じた。

また、35ページと36ページの関係について、36ページでより詳しく書かれていると認識している。掲載内容として、「1が子育て、2が教育環境、3が地域による子育て」と思っていたが、2ページ間の関係整理はうまくできているのか。もし36ページの2番の教育環境の内容を35ページに反映させるならば、「最新技術等を活用した教育現場を作ること」や「教員が児童に向き合えるような業務改善を行えること」などが入るのではないか。

○事務局

35ページと36ページがあまりリンクしていないのではという意見かと思う。主なポイントの一番左の「子どもたちが、自ら考え、行動し、生きる力を身につけること」が36ページの①に、2番目の「誰一人、子どもたちを取り残さないこと」が②、3番目の「子どもたちがいつまでも楽しく学べる環境があること」が36ページの③と④にリンクしているという構成にしている。教育環境については、ソフト面とハード面の両方を含めた文言、意味合いを込めている。

○委員

36ページの2の②・③で、教員のことを書かれているが、これは「誰一人、子どもたちを取り残さないこと」にリンクしているとあったが、あまり結びつかないため、もっと文言があればよいと思う。

○委員

36ページの2-④番のユニバーサルデザインでは、物的な整備が大半であるが、学校現場では思いやりや多様性などの人的環境のユニバーサルデザイン化もあるのではないか。それが感じられる文言があればよいと思う。

○委員

36 ページの 2 の②で「②誰一人取り残すことのない教育」とはどのようなものか。「取り残す」「取り残さない」という言葉はマイナスのイメージがあり、プラスの表現として、「子どもたちの個性が認められ、学校教育を通じて教育の大切さを推進していきます」などとしてはどうかと思う。

○事務局

今回、「誰一人取り残さない」という言葉を使っているが、これは国の「教育振興基本計画」の言葉を引用している。特別支援教育や不登校などの課題に力を入れる思いや、子どもたちのウェルビーイングという意味合いを込めて、「誰一人取り残さない」と使わせていただいた。わかりづらい点があるならば、修正についても検討させていただきたい。

○委員

35 ページに「誰一人、こどもたちを取り残さないこと」とあり、36 ページに同じような言葉があるのは、書き直すのが良いと感じた。皆が楽しく学べるようにという、インクルーシブ教育などの言葉を使ってはどうか。

○委員

「誰一人取り残さない」は国や SDGs で使っていることは知っているが、一般向けには難しいため、「全ての子どもたちに学びと育ちを保障する教育」など、やわらかい・わかりやすい言葉が良いのではないか。

○委員

確かに「令和の日本型教育」で使われているが、その副題は「多様な子供たちの資質能力を引き出す個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と書いてある。そこまで書かれればわかるが、人によってはネガティブにとらえられる恐れがあるので、「個別最適」「社会と繋がる」「協働的な学び」など、言葉を捕捉されるとよいのではないか。

○分科会長

「子育て・教育」に関する議論をここまでとさせていただく。

○「健康・福祉」 前回意見と対応について説明（事務局）

○委員

No9 に関し、独居老人は一人で生活することが難しい場合が多く、フォローでは難しく、どこかにそういった人を集めて、生活の拠点を設けてはどうかという意図であった。見守りします、病院への通院や日頃の買い物を補助しますもよいが、まだ介護認定されてない人などを寮に集めて暮らしてはどうかということである。

また、最後の特定検診については、勧奨していても対応するのは 3 割程度である。はがきによる勧奨のやり方を変えて、訪問医療の充実なども取組として追加してはどうか。

○事務局

独居高齢者はそもそも一人での生活が厳しいという意見について、総合計画では対象者を絞るような表現はせずに、目指すところが同じであればまとめていく方針である。そのため、ここでは独居高齢者に特化したような記載とせずに、関連する高齢者計画があるため、その中で検討していきたい。

○事務局

特定検診については、近年、コロナ禍での受診控えがあり回復していない状況であり、健診結果が悪い方に対して保健指導も行い、指導率は高い状況である。また、かかりつけ医を持つという取り組みも行っている。38 ページの 2 の④で「特定健診や保健指導を行うことで、重症化リスクの抑制を図る」や⑤「安心して医療を受けることができる体制を整える」において、かかりつけ医をもって日ごろから健康意識を高める取組を進めたいと思っている。

○委員

No15 の意見について、未受診の方に勧奨はがきを送付されているとあったが、現代社会では高齢者でもスマホを持っている方もいるため、佐賀市のアプリを入れて検診を受けたら反応があるというのもよい方法ではないか。例えば、佐賀県では「SAGATOCO」というウォーキングアプリがあり、そういったアプリがあればと思う。

○事務局

アプリによる対応という方法もあるが、あまりに多くの課からの情報提供があると、かえって見なくなってしまう恐れがある。どういった対応が良いかは引き続き検討していく。特定検診に限らず、健康づくりの意識を持ってもらうための取組を進めていきたい。

○委員

私たちも地域の方にいろいろな提案をしているが、37 ページの「みんなが地域づくりに参加すること」などと言ったら、「上から目線でものを言うな」と炎上してしまう。やわらかい言葉で書いていただくとともに、参加という形がそこに行くだけではなく、お金や物、場所を提供するなど、様々な形に多様化しているということも意識していただきたい。

○事務局

いただいた意見は、「みんなが地域づくりに参加できること」として、計画の修正案に反映させていただいている。

○分科会長

残りの時間で、全分野について追加の意見があれば、発言いただきたい。

○委員

全ての施策に共通することであるが、行政が何かをしようとしても市民に響かなければ意味はないと考えている。「みんなが地域づくりに参加すること」の箇所は今回修正いただいたが、市民に誤解なく、響くような提案を行い、それをどうやって周知するかが重要と考えている。行政でできることは範囲が限られているが、そのできないところを NPO などと共同で取り組んでいければと思う。そういった言葉を関係する箇所に入れていただきたい。

○委員

「佐賀らしさ」という言葉については、私も違和感がある。特に外から来た人は、佐賀らしさは何かと悩んでしまう懸念がある。一人ひとりが考える多様な佐賀らしさがあってもよいと思う。共通して、誇りに思う、大事にしたいものは何か。

○委員

私も佐賀らしさとは何かを考えていたが、共通意識が理念になると思う。障がい者プランの協議において基本理念に「フラット」を提案したが、上を見上げるということは空が広い、平らであることがもとではないか。フラットという言葉は、多様性・ダイバーシティなど対等な関りを表すとともに、遠くまで見える平野が広がっている佐賀の地形を表していると思っている。この場でみんなが対等に参加して議論できていることもフラットだと思う。

○委員

究極に福祉は何かを考えると、「権利を守る」ことが大きな意味を持つと考える。そう考えると、子育て・教育・健康・福祉という分野であれば、どこかで「権利を守る」という言葉がどこかにあってもよいのではないか。計画では、コミュニティ分野の「自分らしく幸せに暮らす社会の実現」において、人権という言葉も出ているが、教育・福祉においてもどこかに追加してほしい。

○分科会長

本日の審議はこれまでとする。本日欠席の委員については、追加で意見を受け付ける場合もある。

次回の会議は、本日までにいただいたご意見や、現在実施しているパブリックコメントで市民から出された意見を整理し、本分科会としての意見の取りまとめを行う。次回の会議は、7月26日（金）10時から、この会場で開催を予定している。

3 閉会